



2016年3月11日東日本大震災記念礼拝と巡礼

報告書

日本聖公会婦人会



《2016年3月11日東日本大震災記念礼拝と巡礼》の旅を終えて

日本聖公会婦人会
会長 前田 伸子

5年目を迎えた「東日本大震災記念礼拝」を皆さまと共におささげする機会が与えられましたことに感謝申し上げます。また、新地、南相馬、郡山聖ペテロ聖パウロ教会の巡礼と訪問を受け入れてくださいました東北教区の皆さまと被災地の皆さまに、重ねてお礼と感謝を申し上げます。

また、感謝箱献金事務局チャプレン司祭三原一男様には、巡礼地でのお祈りをさせていただき、深い祈りの旅となりましたことを感謝申し上げます。

皆さまからお寄せいただきました報告書を纏めましたので、参加されました北海道から沖縄までの10教区婦人会の皆さまの思いを共有していただきたいと存じます。

京都が日本聖公会婦人会役員会を2013年に横浜から引き継ぎ、これからの東北支援について、何ができるか、絶えず心を傾け、話し合っていました。

震災から年月が過ぎていく中で東北から遠く離れた教区の方からは、訪問する機会が少なく、被災地の様子を教区で共有できないという声を聴き、北海道から沖縄までの10教区婦人会の方に、お一人でも多く身体と心を現地に運んでいただき、見て、聴いて、感じたことを持ち帰り、それぞれの地と東北が繋がり、寄り添える関係が深まることを願い、巡礼と訪問をさせていただきました。

午後1時からの記念聖餐式では、皆さまと共に静かに祈りの時が与えられ、午後2時46分の黙想に続き、被災された3人の方のお話を聴かせていただきました。

宿泊先で夕刻から、津波でご親族を亡くされた磯山聖ヨハネ教会の荒ミヨ子さんと、管区プロジェクト・センター新地専従スタッフ松本普さんにお話を伺いました。荒ミヨ子さんは、お辛い気持ちを抑えて、その日の状況と思いを聞かせてくださり、松本普さんは、原発事故による関連死が増え続けている現実が報道されていないと、憤りを抑えてお話くださいました。

夕食のひと時には、がん小屋仮設住宅で作られた作品120個を皆さんに買っていただき、其々の教区へのお土産となりました。

翌日は、松本さんと一緒に巡礼し、三原一男司祭のお祈りで、5年前にこの地に起こったことを黙想しました。

その後お尋ねした南相馬市寺内塚合仮設住宅の集会所では、フクロウのストラップや置物などを作っ

ておられました。そこでの交流で、各教区の方々が作品を購入し、注文をされていました。震災から5年が経った今でも、仮設住宅で過ごさなければならない現実ですが、集まって手作業をして楽しい時間を少しでも多く過ごしていただければと、相手の方を気遣う交流ができれば、お互いに喜びを分かち合うことができるのではないのでしょうか。10教区婦人会の方々と繋がり続き、そのようなお手伝いができることを願っています。

最後に訪問させていただいた郡山聖ペテロ聖パウロ教会では、夕の礼拝で、被災地の皆さまにまたお出会い出来ることを願い祈りました。

ローマの信徒への手紙 12章 15節「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」のみ言葉を心にとめて、これからも被災された方々との交流を深めていきたいと思えます。

今回結ばれた繋がりが続きますように、神さまのみ守りと導きをお祈りいたします。

【行 程】

3月11日(金)

13:00 東日本大震災記念聖餐式 (東北教区主教座聖堂・仙台基督教会)



☆1

17:30 相馬市松川浦 旅館かんのや到着 ☆2

18:15 講演会 (荒ミヨ子さん・松本普さん) ☆3



19:00 夕食 ☆4

宿泊: 松川浦 旅館かんのや

☆1……東日本大震災5周年記念聖餐式が13時から東北教区 加藤博道主教の司式で行われ、大韓聖公会 金根祥首座主教が説教をされた。臨席者を代表して日本聖公会 植松誠首座主教と日本聖公会婦人会 前田伸子会長の挨拶があった。

14時30分からは黙想と祈り、14時46分には黙禱がささげられた。

またその中で、大友美代さん(箱塚桜仮設住宅在)、三宅友子さん(新地町被災住民ボランティア)河盛芙海さん(日本聖公会「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」郡山スタッフ)がお話しされた。



大友美代さん（箱塚桜仮設住宅在）

☆2……講演会までに各教区での東北との関わり、取り組みについて分かち合いをした。

東北からは遠い教区でも様々な取り組みをされたり、震災直後からの継続的な支援、また繋がりを持った団体にずっと関わり続ける支援の形などが話された。

☆3……大震災時に家族を亡くされた荒ミヨ子さんがその体験を話しされた。また松本普さん（被災者支援センターしんちスタッフ）が「日本聖公会原発と放射能に関するプロジェクト」の新地町プログラムに沿って、現状や活動を話された。



松本普兄と荒ミヨ子姉のお話



分かち合いの時

☆4……夕食の前後にがん小屋仮設住宅の手作り品のミニバザーで120個を完売した。



和やかな夕食のひと時

* 3月12日(土) *

8:30 旅館出発



新地被災地巡礼(松本さんご案内) ☆1

10:45



南相馬被災地巡礼(大留さんご案内) ☆2

13:30 南相馬出発



6号線・高速道路で郡山へ ☆3

16:30 郡山聖ペテロ聖パウロ教会到着



夕の礼拝 ☆4

郡山駅、仙台駅で順次解散

☆1……磯山聖ヨハネ教会の仮礼拝堂(齋藤研さんのスタジオ)、東林寺・埒浜慰霊碑、
磯山聖ヨハネ教会跡地を、松本さんのご案内で訪れた。



磯山聖ヨハネ教会仮礼拝所



磯山聖ヨハネ教会跡地



東林寺・磯山らちま埒浜地区共同墓碑

☆2……鹿島区寺内塚合応急仮設住宅を大留さんのご案内で訪問し、手作業をされる集会所で、仮設住宅の方のお話しを聞き、手作り品を見て購入した。その後「原発事故から命と環境を守る会」六角支援隊の基地となった大留さんのホテル六角を訪ねた。



鹿島区寺内塚合応急仮設住宅

☆3……放射線量の高さからようやく近年四輪車が通れるようになった6号線、高速道路を通りつつ、原発事故により荒廃した地域を車窓から見た。除染土が入った黒い袋、5年の歳月が感じられない復興の先が見えづらい光景に言葉を失った。



車窓から見える、行く宛ての無い汚染土

☆4……コアチャプレン三原司祭の司式で夕の礼拝をおささげした。

その後、教会委員の三宅さんと「東日本大震災被災者支援」原発と放射能プロジェクト事務局長の池住圭さんのお話を聴かせていただいた。



郡山聖ペテロ聖パウロ教会礼拝堂

「原発は ひととき 一時の夢 とわ 永久の闇」

感謝箱献金事務局チャプレン 司祭 ヤコブ三原 一男

新聞に出ていたこの川柳のもつ意味を実感させられた旅でした。随所に見られる除染中の旗、その膨大な除去土壌などの放射性廃棄物を置く場所、「仮置場」のその前の「仮仮置場」という言葉を聞き、何ともやりきれない気持ちになりました。本来美しいはずの豊かな自然なのですが、もはや「海も見たくない」津波を思い出すから、「山も見たくない」放射能に汚染されているから。という大留隆雄さんの言葉が忘れられません。そう言えば、震災後、放射能汚染のため復興に手がつけられないことについて、「復興」という字の上に放射能のベールがかかってしまい復興が見えない。もしそのベールが取り去られたら、復興がはっきりと見えて、自分たちはどんなことがあっても必死に、復興に向けて一歩ずつでも前に進むことができるのだが、悲しいというより、くやしいと言っておられたのを思い出します。

私は今年の1月末に、横浜聖アンデレ教会の、震災復興支援アンデレプロジェクトから3人で、福島聖ステパノ教会との打ち合わせの後、仙台からレンタカーで、ほぼ今回と同じコース、新地、南相馬を訪問し、常磐線いわき駅まで車で走りました。新地では、今回「被災者支援センターしんち・がん小屋」の松本普さんのご案内で磯山聖ヨハネ教会の跡地、新しく建てられた墓地など見学しましたが、私たちが新地町勤労青少年ホームでの水曜喫茶に参加した時には、がん小屋仮設住宅に住む人たちの、放射能汚染で避難し先の見えない状況にある重い言葉を聞くことができました。南相馬ではその途上、大留さんのご案内で、塚合仮設住宅の集会所で、様々な手芸品を作る婦人たちとの交流をすることができました。そして放射能の被害を受けた南相馬市小高区を訪れました。残念ながら当初予定されていた、小高区と浪江町の堺にある「希望の牧場」には行くことができませんでしたが、殺処分を拒否して、被爆した330頭の牛を飼いつづけている吉沢さんは牛の命と運命を共にする覚悟であり、そのことに何かの意味があるかも知れないという話を、1月の時には大留さんにご案内いただき、吉沢さんにはお会いできませんでしたが、共に働く方から聞いたのです。

そして、今回は時間の関係で、早めに高速常磐道に乗りましたが、1月の時には、延々と6号線を走り、途中の町はずれで、何と道の脇から野生のいのししが飛び出してきて危うくぶつかる場所だったので思い出していました。

全国10教区の婦人の皆さんと役員さんたちと共に、言わば黒一点、チャプレンとして参加させていた

できました。最後の夕の礼拝と、祈りの場面が何度かありましたが、思いがけない役割としては、新地の松本普さん、南相馬の大留隆雄さん、このお二人のバスの中でのガイドのために、代わりに彼らの車の運転をさせていただいたことです。特に大留さんの軽トラをマニュアルで運転したのは楽しい思い出となりました。ありがとうございました。



・・・ 参加者の声 ・・・

報告者：感謝箱献金事務局運営委員長 古谷 美子

3月11日の「記念聖餐式および午後2時46分の黙想」には植松首座主教、各教区主教、司祭、韓国からの首座主教、教役者を含め約200人で聖餐式に与り、その後、地震発生の時刻に合わせ鐘の音と共に黙想をささげました。

北海道から九州までの各教区婦人会代表33名は、礼拝、茶話会后、バスで相馬市松川浦に向かい、津波で被災し、復興された旅館に到着、「被災地支援センターしんち・がん小屋」の松本普氏と磯浜聖ヨハネ教会信徒、荒ミヨ子姉より当時の話を聞くことが出来ました。また、各教区からの現在までの支援や交流の状況も話され、それぞれの教会・教区で、被災された方たちへの思いを共に出来ました。地震発生当初は着るものや食べるものの支援からはじまったものの、5年経った今求められているのは、単なる物資ではなく、心の支え、交流、希望だということも分かってきました。

この度日本聖公会婦人会・感謝箱献金からの「東日本大震災被災者支援積立金」からの交通費援助で全国10教区の婦人会から参加を募集し、実際に見て、当事者の話を聞き、感じてこれから何が出来るのかを各教区で検討し実施すると言うことが、目的の旅でした。すでに、つながりが出来、交流されているグループ・教会には是非今後とも続けていただきたいと思います。また、この旅行で気づいた新しい交流ができればと期待しています。

もう財政的な支援は必要ないということはないと思います。両親を亡くした子どもたちの学費、経済的な理由で仮設住宅を出られない方たち、大きな財源があればいくらかでも支援先はあるはずですが、でも私たち婦人の力では気持はあっても出来ない状況があります。助けているNPOなどを調べて手紙で励まし、学用品を贈るくらいは出来るのではないかと個人的に思っています。

仙台基督教会の西正子姉より、磯山聖ヨハネ教会が新しく建築された折には、日本聖公会婦人会より記念樹を頂きたいとの要望を知り、是非実現したいと思います。

年々信徒が減り、寂しくなっている東北の教会を旅行を兼ねて訪ね、礼拝に参加することもできると思います。また、その教会から得た情報をもとに、今、求められているものに対応できるかもしれません。希望の見えない毎日を送っておられる方たちがいるならば、私たちは日ごとのお祈りと共に、心の支えになれることが少しでも出来ればと共に考えていきましょう。

報告者：感謝箱献金事務局(コア)スタッフ 土屋 晴子

3月11日、東日本大震災から5年、「日聖婦巡礼の旅」に参加させて頂きました。

東北教区首座教会仙台基督教会で、東日本大震災5周年記念聖餐式が、東北教区加藤主教の司式で行われました。植松首座主教はじめ、各教区主教、司祭、大韓聖公会首座主教の金根祥師父、多数の信徒と日聖婦巡礼の旅の33名が参加しました。日本語を交えた金主教の「痛みを共有し、今自分に何が出来るか、平和の働きの大切さ」等、心に響くお説教の後、2時46分、鎮魂の鐘の音に続き、黙想。次に被災された3人の方々の震災時のお話しを伺いました。カンタベリー大主教と大韓聖公会のテジョン教区

主教から、「同時間に震災を覚えて祈ります」とのメッセージが届き、主の下では皆一つに繋がっていることを実感致しました。

式典後、茶話会が開かれましたが、私達巡礼隊は、南相馬、新地、郡山に向けて出発、宿は、津波で被災し、復興をはたした松川浦の旅館でした。夕食時に、磯山聖ヨハネ教会の荒ミヨ子姉、「支援センターしんち、がん小屋」の松本普兄のお話を伺い、仮設住宅の方々が作られた可愛い品々を購入し、楽しいひと時を過ごしました。翌日、新地町まで、松本兄のお話を聞きながら被災地巡礼、磯山聖ヨハネ教会跡地へ向かいました。3名の信徒さんが津波の犠牲となり、近隣住民の避難場所となった老朽化した教会は、解体され、「祈りの碑」が建てられます。犠牲となった信徒の御主人から、土地が寄付され、再建も間近のようで、実現への努力と思いが伝わって来ました。3名の犠牲者が眠る墓地と慰霊碑に魂の平安を祈りました。

その後、大留隆雄さんの案内で南相馬仮設住宅へ行き、小さな集会所にお邪魔して、仮設の方々の手作りフクロウや、おさるのストラップ等を購入し、お話しをさせていただきました。皆さまの明るさと、温かさの中に、どれ程の悲しみや苦しみを乗り越えての「今」かを思うと、被災された方々の心の痛みは、想像を絶するものだと思います。南相馬から郡山へ向かう車窓では、津波後整地された広大な土地に、除染廃棄物の黒いビニール袋が何千も積み上げられ、増えるばかりで放置されています。今では、13か所で1千万を超える状況で、放射線問題の深刻さを目の当たりにしました。

最後に郡山聖ペテロ聖パウロ教会で礼拝を捧げ、「被災者の方々の上に、主の平安が豊かにありますように」と、心からお祈りをしました。沢山の人々にこの地を訪問し、現状を見て感じて頂くことの大切さを痛感し、帰路に着きました。



報告者：日本聖公会婦人会役員 小林 格子

全国から来られた皆さんをご案内するスタッフとして参加させていただきましたが、多くを盛り込んだ旅程を気にするあまり、失礼や行き届かないことが多かったことをお詫びします。ただ個人的には震災後初めて東北の地に足を踏み入れたことは本当に大きな得難い経験となりました。「家族はいつも一緒にいたい」のメッセージ付きのフクロウを手仕事で作られながら、それが叶わないだろうとの諦観が作り手の方たちにある…とお聞きしました。

津波の後、人々の暮らしが息づいていた街がすっかり流され、はるか向こうに海まで見えているという旧磯山教会跡地からの眺め…。

郡山の子育て中のお母さんの「福島で生きていくと決意した者たちの間では、放射能汚染のことを口に出すのはタブーで、いじめられる原因にもなる、早期に発見された子どもの甲状腺がんの手術跡は将来も消えない烙印になってしまう」というお話が心に重く残りました。

私は東北から離れた場所において何を聞き、何を思ってきたんだろう…もう5年も経っているからね、と根拠のない楽観をしている周囲の人も少なくありませんでした。

全国から集まられた各教区の皆さんの取り組みを分かち合えた時間からも大きな気づきをいただきました。今まで東北との温度差は地理的なものとばかり思い込んでいましたが、その温度差は直接繋がって寄り添うことで埋められるのです。どこかと繋がっていたい、繋がっていることで震災を風化させず、小さくされている方々や現地の思いと寄り添うことができると思いました。

いつも教会の婦人の集まりで唱えていた被災地へのお祈り…それは今までは白黒でしたが、今回の訪問で色がついた気がしました。人間の想像力には限度があり、やはり直接現地を訪ねてその地の皆さんのお話や現状を知ること、これからの道が示されたと感じました。そしてそれを1人でも多くの方に伝えることが参加の機会をいただいた私の使命だと思います。

今回の巡礼で「東北を 忘れないで」というメッセージをいただきましたが、京都では想像することもできなかった現地を知ることができ、多くのことをいただいた忘れられない巡礼の旅となりました。



《北海道教区婦人会》

報告者：沖田 京子

3月11日朝一番の飛行機で出発、お天気が良く暖かい日となり、5年前の震災の日を想いながら教会に到着。主教座聖堂仙台基督教会は、新築されとても立派で美しく吹き抜けの天井の高い建物でした。

予定通り1時より東日本大震災5周年記念聖餐式が、東北教区加藤主教様の司式、説教は大韓聖公会首座主教（ソウル教区）金 根祥主教様で執り行われました。臨席された植松首座主教様はじめ6教区の主教様、管区総主事、大韓聖公会教務院長、東北教区司祭、沢山の信徒たち、日聖婦役員、各教区婦人会が出席でした。2時46分震災の時刻に黙想が行われ、越山哲也司祭のお祈り黙想、続いて3人のお話し。名取市箱塚桜仮設住民の大友美代さんが体験なさった辛いお話を。新地町被災住民ボランティア三宅友子さんは原発で大勢の方が苦しみの中、堤防の嵩上げ工事は順調に進み置き去りにされる住民。日本聖公会「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」郡山事務所のスタッフの河盛芙海さんのお話は原発の恐ろしさを再確認いたしました。報道されない事が沢山ある事、国の対応の悪さ等、辛い重いお話でした。日聖婦前田会長のご挨拶があり「私たちに出来る事」と課題をお話し下さいました。

植松首座主教の祝祷、越山哲也司祭の派遣で礼拝を終了。仙台基督教会がご用意下さった茶菓などいただき、急ぎバスで宿泊地相馬市松川浦に向け出発。宿泊先松川浦「かんのや旅館」に到着。お2人の講演。仮設にお住まいの荒川さんの辛い体験談をお聞きしました。支援センター「新地がん小屋」スタッフ松本さんのお話は資料を基に被災状況を現在に至るまでのお話をお聞きました。地震、津波による被害は日を追う毎に復興されつつあるが、放射能に関しては、未だ解決されないままである。

翌日松本さんの案内で新地への被災地巡礼が始まりました。途中「磯山聖ヨハネ教会」跡地を訪れる。犠牲になった方の墓地がある東林寺・埴浜慰霊碑を見学お祈りする。線量が高くバスの窓を開ける事も、降りる事も出来ず、外気も入れずに車窓から見える家々は放射能汚染のため誰も住んでいない。そんな中でも家の庭に白梅が綺麗に咲いていた。海沿いに見える事故があった原子力発電所、白煙を上げている火力発電所が車中から見えた。至る所に除染した土が黒いビニール袋に入り、仮・仮置き場に整然と置かれていた。そんな中、高い堤防が作られ、常磐線の建築が進んでいた。南相馬に入り、大留さんの案内で鹿島区寺内塚仮設住宅を訪ねる。とても喜んで下さる。沢山の手作り品があり買い求める。郡山市に入ると急に人の動きがあり、若い人、子どもたち等沢山の人が生活していた。郡山聖ペテロ聖パウロ教会を訪ね、夕の礼拝を共に捧げする。礼拝後教会委員の方が教会の被害状況をお話し下さいました。

北海道の3人は最終便で帰るためお話の途中で慌ただしく失礼する。

今回の巡礼の旅はとても重く辛い旅でした。これから私たちに何が出来るかを模索中です。

なかなか訪れる事が出来なかった福島への巡礼を企画下さいました日聖婦役員の皆様に心より感謝申し上げます。ご準備など大変だったと思います。本当にお疲れ様でした。感謝。

報告者：ルシア 山崎 恒子

震災記念日も間近かとなり急遽思いがけない機会をいただき、私にとっては震災後、初めての東北の旅となりました。2011年はもちろんのこと、毎年この日の前後は心重く、苦しくできるならば面と向かわず、ただ心に留め祈っているだけで終わらせたい思いでいたのです。

11日はここも水が押し寄せたのだな・・・と思いつつ、仙台空港に降り立ちました。そして午後1時からの仙台基督教会での大震災5周年記念聖餐式、午後2時46分の黙想に加わりました。黙想の後、三人の方がそれぞれの立場でのお話をされましたが、「5年経って住めば都と・・・前向きに」「環境が整い、復興が行われているよう」というお話にも何か痛々しいものがありましたし「放射能への不安、先が見えない」と訴えには本当に何とも言えない辛いものを感じました。

私たちの宿泊地、松川浦の旅館の窓からは遠くに海と防波堤が見えましたが、あの防波堤を越えて想像もつかない大きな津波がやってきたのだと、お二人の方のお話も合わせて改めて恐ろしさを覚えました。12日には報道でしか知らなかった新地、南相馬等の被災地巡礼が行われ、説明して下さる方とともに何か所かを回りました。仮礼拝堂や仮設住宅も心に残りますが、なによりも驚いたのはいつもニュースに出てくるあの黒い袋、除染した土を入れた袋が広大な指定の場所だけではなく、家の庭先にまで積まれていることです。

まだまだレベルの高い放射線量のこと、政府の言う20キロ圏内、原発の関連死・・・目の前にある危険をここへ来て見て考えさせられました。とてつもなく大きな地震、津波の災害でしたが、自然の災害は人間はいつか立ち直れる力を持っているのではないのでしょうか。でも放射能に関してはそうではなく、なすべき力を持ってはいないのです。そのことを強く考えさせられます。

現地に立って、“見て、聴いて、知って、感じた”ことはやはり遠くで静かに想っているだけではなく、しっかり記憶し少しでも皆さんにわかっていたくようお伝えできれば、と思いました。今もなお、新地で支援センタースタッフとしてお働きの松本氏などにお話を伺う機会を持つことも良いかもしれせん。

まだまだ不安の中にある方々を憶え、神様にお祈りいたします。また、今回のこの巡礼の旅を準備して下さいました、日聖婦の皆様方に感謝いたします。本当にお疲れ様でございました。

報告者：植松 三千代

3月11日、仙台基督教会での東日本大震災5周年記念礼拝に参列。礼拝後、3人の方々の被災体験をお聞きしながら、5年前、テレビの画面に呆然として一晩中つけたまま、祈る言葉もなく過ごしたのを思い出しました。未来に希望を持たないまま過ごしてこられた方々にとって、その苦しみが風化されていくことへの恐れ、自分達の苦しみを平和の礎として欲しいとの言葉・・・それは即ち、私達への厳しい問いかけでした。メディアから震災後のいろいろな情報が消えていく中、私自身、改善されているような錯覚さえ起こしていたのでした。そしてそれは、その日の午後、日聖婦の企画して下さった一泊の被災地巡礼に出かけたことで、改めて目の前に突きつけられた問題でした。バスで移動した会場で証言をして下さった、磯山聖ヨハネ教会信徒の荒ミヨ子さん。その穏やかな話しぶりの中にも大きな苦しみを抱えてこられたことを重く感じたのでした。この5年間、想像もつかない、抱えきれない悲しみを担って、毎日をどのように生きてこられたのだろうか、もしかしたら、「生きている」・・・という感

覚さえ失わせる日々だったのではないかと息のつまる思いでお聞きしました。翌日にその磯山聖ヨハネ教会の跡地に立ち、美しい田園風景であつたらうその場所を想像しながら、もう一度荒さんのお話を、亡くされたお兄様ご家族のことを思い出したのです。今後は別の場所に新しい教会を建てる・・・とのこと、そのことがどうか信徒の方々、そしてその地域の方々の新たな希望になるようにと祈らずにはいられませんでした。今後自分に何ができるかわからない、せめて、祈ることを忘れてはいけない、いつも心を奮い立たせてこの地に立った時のことを思い出せるようにと願いました。仮設住宅の集会所にもお邪魔しました。寺内塚合仮設ではお年を召した方々が毎日のように集まり、小物やお人形を作っておられます。30数名もの私たちのために温かいお茶を淹れ、お漬物を出して下さったのです。日曜日以外はここに集まるといふ方々・・・こうして苦しい中、支えあつて生きてこられた仲間がおられるということに心強さを感じ、その中のお一人の一言、「何も言う事はありません、もう有難くて・・・。村井さんによろしくお伝えください」と仰り、一番大へんな時に、日聖婦が寄り添つてこられた事実に何かほっとした思いでした。その後、バスの移動中、何度も目に入るのは除染廃棄物が詰められた不気味な黒い物体が積み重ねられた現実でした。今回、私にとって一番印象に残ったのはこの怖ろしい、原発が産み出した現実でした。放射能という目に見えない恐怖が正に、目に見える現実となって至る所に置かれている光景。民家の横にも置かれ、畑にも積み上げられ、仮の仮置き場・・・とのことではありますが、結局は永久的に置くのではないかという説明に、どこに向けて良いのかわからない憤りを感じました。その現実を知りながら、まだ原発再稼働が当然のように計画されていることに、言いようのない悲しみを感ずります。浪江から高速に入って水戸方面に向うバスは外気を入れられない状態で走行。外は4、7シーベルトの表示でした。広島で何度も見た「安らかに眠ってください。過ちは繰り返させぬから」という慰霊碑の言葉が浮かびます。原発によつても、また取り返しのつかない過ちを繰り返すことになる、私達人間の愚かさ、どう立ち向かつて行けば良いのか、つくづく考えさせられる旅となりました。

このような企画をして下さった日聖婦の役員の方々に感謝いたします。主にある真の平和と幸せをすべての人にと願います。



《東北教区婦人会》

報告者：佐藤 洋子

33名の全教区婦人会の代表の皆様の参加を得て、一泊二日の巡礼の旅へ参加しました。

まず最初に遠方に在って、度々の訪問を続けて下さる皆様には、頭の下がる思いが致しました。

この5年間、東北の被災者に、祈りとご支援をくださった、多くの姉妹に、感謝と共に、逆に励まされる思いでした。

一日目は、新しく復興された相馬市松川浦の“かんのや”旅館へ宿泊し、松本普さん、荒ミヨ子さんのお話を伺いながら、ミニバザーが開かれ、分かち合いの時間が持たれました。

自身の近況報告やら、どのような支援の方法が続けられるのか等、ちょっとした悩みも含め、夜遅くまで話合いの時を持ちました。

二日目は、新地町へと向かいました。

バスの中より、海から被災地までの実に遠い道程を、津波が押し寄せた様子を目にし、改めて驚きと同時に、現地に住まわれていた方々の無念を思うと、胸が塞がれる思いが致しました。

原子力発電所の無残な姿には、言葉を失いました。

自然への畏怖の念は、近年世界中各地で起きる自然災害の情報を耳にし、人間の限界と、自然との共存を思う時、如何に融和させるかとの問いなのだとして深く考えさせられました。今もまだ関連死を含め、召されていく方々が後を絶たないという説明を聞きながら、私達人間がもっと深く考えなければならない事、文明の便利さに慣れてしまった私達が、変わらなければならないのではとの反省が、頭の中いっぱいに広がりました。

警鐘を鳴らされ続けている現実には、どう向き合うのかが問われている課題だと感じました。それにしても、とても深い困難の中に会って、明るく私達を迎えて下さった鹿島区寺内塚合総合仮設住宅の婦人達に、神さまの祝福が豊かにありますようにと切に祈ります。

報告者：戸塚 敏子

東日本大震災記念礼拝と、巡礼に参加させていただきありがとうございました。

同じ東北の地に住んでいながら、福島の南相馬の町を伺うのは初めての訪問でした。

様々なメディアでの報道、お話し、地域での物資のボランティア活動、教会での祈り、奉仕等で震災の被災を理解していたものの、客観的なかわりであった事を痛感いたしました。

震災後 5 年が経ち復興という言葉の響きの中で、形は見えてきたものの、地域の皆さんは心の痛手はどうなのだろうとかがいながら、お話を聞かせていただきました。

記念礼拝の中で告白して下さった方々、旅館でご自分の体験したご家族の痛ましい話を淡々としてくださったご婦人、がん小屋で明日に向かって奉仕してくださっている方のすがたに、生きることの力強さを感じました。

原発の放射能汚染で、住まいを奪われた方々、バスの中から見た無人の町の異様さ、汚染されながらも町に生息している生き物達、それらに戸惑うばかりです。

まず私に出来ることは祈ること、そして視てきたこと、町において、実際にお話を聞いたことを私の言葉で周りの人々に伝えることの大切さを感じています。

メディアも報道しない事実があること、風潮被害に押し流されることなく確かな目で見て感じ被災された方々と一緒に歩んでいきたいと思えます。

教区聖堂での全国から海外までの皆様と共にお礼拝が出来たことを感謝いたします。

今回の巡礼の旅を計画して下さいました日聖婦会長、役員の皆様にお礼を申し上げます。

有難うございました。



《北関東教区婦人会》

報告者：齊藤 道子

北関東教区からは、四名が参加致しました。仙台基督教会での《東日本大震災 5 周年記念聖餐式》に出席し、記念聖餐式に続いての〈午後 2 時 46 分の黙想〉で、私達は、震災から 5 年を経て今も苦しい思いを抱えていらっしゃる被災された三人の方のお話しをお聴き致しました。そして、その日の宿では、姪御さんとそのご両親である兄妹を亡くされた荒ミヨ子さん(磯山聖ヨハネ教会信徒)のお話しを伺いました。皆様に起きた壮

絶な様子を、黒い恐ろしい水が押し寄せて・・・と、本当にお辛い体験をお話し下さいました。お聴きしていると、私達に一体何ができるのかという思いに押し潰されそうになりながら、ただただ私達は忘れてはいけないと誓いました。

巡礼では、バスで仙台市から相馬市へ被災地を走りました。6号線に入ると景色が一変しました。除染で出た土を入れた大きな黒い袋が目につくようになり、家主のいない家々が生活の後を残して立ち並ぶようになりました。放射線量の一番高い所では、4.2 マイクロシーベルトの表示が見えました。広い田畑には黒い袋が、何段にも積み上げられていて、その光景は異様です。避難解除とはとても信じられません。高線量の帰還困難区域を分けるバリケードの前で、マスクも付けず立つ警察官の姿に、違和感を覚えました。翌日お会いした六角支援隊の大留さんは「まだ原子力に頼った社会を継続しようとしている国は、人の命を何と思っているのだ!」と話され、その怒りが心に強く刺さりました。

「磯山聖ヨハネ教会」は、移築する事になりすでに取り壊され、周りは、ダンプが土を運ぶ音と、海の全く見えない防潮堤が高くそびえていました。教会跡地には石碑を立て、信徒さんの心の拠り所として大切に守って行くと言う事です。又「埴浜慰霊碑」では、司祭様にお祈りをして頂き、多くの御霊に安らぎがありますようにと、皆様と祈りました。

南相馬市では「南相馬市寺内塚合仮設住宅」に参りました。集会室には6人のご年配の婦人達が、可愛い手芸品を作っけいらっしや、皆沢山買い求めました。どの品も丹精込めて作られていて、今も皆様に支え合い頑張っけいらっしやる様子に、支援の芽を絶やしてはならないと強く思いました。

最終の地「郡山聖ペテロ聖パウロ教会」は、礼拝堂の修復がまだでしたが、信徒さんのご奉仕により修復されたステンドグラスは、誠に美しい絵柄でした。会館は、耐震工事により建て替えられ、地域に開かれた会館として使われているそうです。子供達へのリフレッシュプログラム実施もあっけ、隣にあるセントポール幼稚園では、震災後一時減っけいった園児の数が、今何と震災前よりも増えたとっけ事です。この継続した支援が実を結んだのでっけしょう。

津波では、今尚行方不明の方が2,561人。生活再建の目途がつかないまま避難生活を余儀なくされている方が170,000人を超えているとっけ事です。仮設住宅での生活から踏み出した人の中にも、孤独感を抱えていらっしやる方がいるのではないのでっけしょうか。今こそ心のケアが求められています。そして、一人一人に合っけた違っけ支援が必要とされているとっけ思います。

私達に何が出来るのかを想像力を持って考え、忘れない事。そして、支援を継続し続ける事が何より大切だと感じました。これからの被災地とのあり方を考えさせられる二日間でした。こうした機会をお作りくださいました日本聖公会婦人会の皆様に、心より感謝申し上げます。

この震災で被災された全ての方々、未だ苦しみの癒えない方々に、どうぞ神様の安らぎと、お恵みが豊かにありますように、お祈り致します。

報告者：須永 美知子

2016年3月11日、東北教区主教座聖堂 仙台基督教会において開催された、東日本大震災5周年記念聖餐式 一すべての逝去者、困難のうちにある人々を覚えて—に出席させていただきました。私達は毎年被災地訪問・巡礼の旅を行っていますが、5年目の今年は、これまでに知り合っけた被災地の人々のことを思い出し、特に深く祈る気持ちでした。礼拝後、北海道から沖縄までの婦人会の皆様と日聖婦の皆様の用意されたバスに乗り、被災地を訪れました。相馬までの車窓、名取はものすごい津波で大きな被害にあっけたところでした。除染した土の入っけた黒いビニールの袋が延々と並び、そのビニールには穴があい

て芽が出ている様子に驚きました。松川浦の宿では、磯山聖ヨハネ教会の荒ミヨ子さんから震災当時のことをお聞きしました。翌12日は新地でご活躍されている松本さんのご案内で、東林寺、磯山聖ヨハネ教会、をお訪ねしました。磯山聖ヨハネ教会は、震災の翌年から毎年お訪ねしていますが周りに何もなくなってしまい、居住禁止区域にもかかわらず高いコンクリートの防波堤がそびえ立ち、人が住めないのにどうして、という思いでした。今回は訪問できませんでしたが、ふじ幼稚園の亡くなられた園児、先生、ご両親の皆様のことを思い出しました。

その後、南相馬市鹿島区塚合総合仮設住宅をお尋ねしました。皆さん仲良く、お元気に手作り品を作られ販売されていました。

今回の旅の最後は「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」の本部である郡山聖ペテロ聖パウロ教会で、チャプレンの三原一男司祭からお話とお祈りをいただきました。まだまだ復興の道は先が長いとつくづく思い知りました。

今回の企画をご準備下さった日聖婦の役員の皆様に心から感謝申し上げます。教会に戻って、東日本大震災の5年経過した現状を婦人会で共有しました。これからも、亡くなられた皆様、いまだ見つからない方々のことを忘れずに祈り、支援し続けることが大事なのだ、ということ全員で話し合いました。



《横浜教区婦人会》

報告者：宮崎 淳子

『・・・現地に赴き、現状を知っていただき、自分たちの教区で何ができるか、どのような支援が必要か。見て、聴いて、感じていただきたい・・・』昨年日本聖公会婦人会会長会での呼びかけに、本当に1人でも多くの方が、肌で見て感じて痛みを分かち合い、そしてどんな支援を、これからもみんなでき取り組むかを一緒に考えることが必要ではないかと思い、この度の巡礼に参加させていただきました。

震災後新しくなった仙台基督教会にて、多くの皆様方と共に記念礼拝に参加できましたことはまず感謝でした。そして何よりも心引き締まる思いと悲しみを乗り越えて生きてこられた多くの被災者皆様の涙に心から思いをよせ、被害にあわれた方の報告を直接伺って本当に心が痛みました。明日への生きる道に私たちが寄り添って生きて行く事が出来ますように、神様の慰めと励ましをお祈りさせていただきました。

記念礼拝の後ホテルでの夕食会では、いまなお仮設住宅で住まいながら、被災当時のことをお話くださったKさん、その被災者の方を、ご自分も被災者ながらこの災害にいろんな角度から立ち向かってこられている松本普(ひろし)兄のお話は深く考えさせられました。(＊松本兄は被災者支援センターしんち・がん小屋で『原発と放射能に関する特別問題プロジェクト』スタッフで被災地でボランティア活動をされておられます。)

東日本大震災の復興は、一向に進まないとか、何をしているんだとか世間での批判は一杯。しかしそこで生活している人は、今何を一番望んでいるのか、もっと身近に聴いていくことが第一であること、そのためには被災地の現状をもっと目で見ていかなければと、現地を巡回し、お話を直接伺って強く思いました。津波と原発放射能の被害と、想像をはるかに超えての災害であることを実感させていただいた巡礼の旅でした。

宿泊させて頂いた松川浦の『旅館かんのや』では、「ここまで水につかったよ」と旅館のご主人の説明。

亀裂やしみは修復されていますがその印は残そうと、お花などのアートで記され、泊り客にも一目瞭然でした。もちろん私の背丈をはるかに越える高さ（2メートル以上？も）でした。

また、相馬郡新地の小高い里山の一角にありました歴史ある磯山聖ヨハネ教会（1936年に新築）が地震で壊され、信徒の皆様全員が被災者、亡くなられた方がお二人とお聞きし、その教会の跡地でのお祈りには心が痛みました。その場所では諸事情で教会は再建できないが、代わりにところで今年度中には再建が予定されているとのお話でした。

バスの車窓から放射能被害地、立ち入り禁止地域を目の前に見て、除染された土が黒いビニールの袋につめられ、仮の置き場、また仮の置き場として沈黙の行を強いられているかのように、広い元耕地跡に整然と置かれている姿は、これからどうするのか、どうなるのか、なんともいえない怒りと、ため息と、憤りを覚えました。皆様と共に祈り、語り続けていくことがまずは大事なことで・・・不安一杯の気持ちで帰って来ました。

小さな私にできることは本当に微々たることですが、小さな支援の積み重ねもまた大事なことで、周りの友人知人、教会の皆様方と神様のお支えをお祈りすることを忘れないでいきたいと思えます。

今回の企画、進める上での議論もいろいろあったかと思いますが、まずは現地まで出かけることに機会を見いだせなかった私には、現地を訪問して、被災された方からも直接お話を伺ったことの収穫は大きいものでした。現地で、思いを同じくする全国の婦人信徒の皆様と、共に祈りを献げられたことはとても良かったとおもいます。日聖婦役員会皆様には大変お世話になりありがとうございました。参加で出来ましたこと心より感謝もうしあげます。

報告者：谷 佳子

この度、機会をいただき参加できたことを神様に、そして日聖婦役員の皆様へ深く感謝申し上げます。

参加までにいろいろ複雑な思いを抱えておりましたが、結論は「行ってよかった」でした。実は、私が被災地を訪れたのは今回が初めてでした。今までお会いしたことのない大勢の方のお話を伺い、話し合えたのは私の狭い目を広げていただきました。

5年を過ぎた今、私たちに、私にできることが何かを具体的に考え、行動に移してして行きたいと思えます。聖餐式で、宿で、現地でそして夕の礼拝後に伺ったお話しが胸に響きます。現地に耳を傾け、私の自己満足ではなく、今必要とされていることを正しく見極めたいと思えます。小さなことでも踏み出したいと思えます。

私のモットーである「できる事を、できる人が、できる時に」でお手伝いしたいと思います。

本当に良い機会をありがとうございました。



《中部教区婦人会》

報告者：尾頭 廸子

出発の朝、予定より早く目覚めた私は、耳元のラジオを聞いていた。

3.11の朝でもあり、元教師で今は作家の方（名前は失念）が、あの日以来、定期的に被災地訪問をしているという話をしていた。一人の漁師さんは、「もう海には戻らない」と言っていたが、ある日堤防の切れ目に土を盛って、花壇を作っていた。その姿を一目見て、この人は立ち直れると思った、という話にすっかり目が覚めて聞き入った。なぜそう思ったのだろう。

この地方では、半農半漁の人たちが大切にしている「花ごよみ」というものがある、この花が咲くとあの魚が寄ってくる、あの花が咲くと・・・と知らせてくれるものだという。人の悲しみに寄り添うとは、こういうことかと、「私に何が出来るのだろうか」という思いがフツ切れて家を出ることが出来た。

仙台基督教会での礼拝の後、バスで「かんのや旅館」へ。目の前が海なのに、磯の香りも海鳥の声もない静かな宿だった。すぐに荒ミヨ子さんの体験談を聞く。もの静かな声で、トツトツと話をされる姿に、苦しみを乗り越えた人の思いがこもる。幼稚園児を送迎バスから救い出し、ご自分は命をおとされたあの先生は、お身内であったとか。

翌朝は、宿のご主人から、2m以上「水」が来たという印の下でお話を聞く。「水」と言えばきれいに聞こえるが、海底へのドロ、陸地のすべての汚物、それに加えて重油が混じり合ったものだったとのこと。匂い、音・・・、恐怖が五感に伝わってくる。

又、車窓から見た、何キロも先の海岸が見わたせる静まりかえった広大な土地は、6才の頃の東京大空襲後の漠漠と広がる、目黒での光景がフラッシュバックして来て、悲しみにおそわれた。やがて公園になる予定の野原に点々と野積みされているあの黒い袋の山はどうなるのだろうか。

朝のラジオの声がよみがえる。「日本列島に住むかぎり、私たちは被災者とまだ被災していない者と2つにしか分けられない。誰もが、日々心して、どう災害に対処していくか考えて暮らす必要がある」と。

この巡礼の旅を計画された、日聖婦役員の方々に感謝を込めて。

報告者：長井 登茂子

私は愛知県と三重県の県境の小学校で教師をしています。そこは海拔0mより低い地域で、かつての伊勢湾台風では浸水が2ヶ月以上続き、ようやく11月ごろ水が引いたという土地です。津波が来ても、逃げる高台はありません。大震災以来、誰もが不安をもって暮らしています。

2011年3月11日、午後2時46分、私は5時間目の体育の授業を終え、職員室で使った道具の後片付けをしていました。長い横揺れを感じ、児童のいる教室へと急いだことを思い出します。ちょうど、低学年の児童が下校のために校庭に集まる時刻でした。後に、校庭に集まった小学生や教師、バスに乗った園児と保育者の犠牲を伝え聞いたときに、自分の目の前にいるこの子達がもしや、と少し考えるだけでも恐ろしさがこみ上げてきました。被災した方々のお気持ちは、私にはどうも真に理解できるものではありません。

今回、被災した土地に行き、そこで5年間を過ごした方々に直接お目にかかってお話を伺うことができました。とりわけ、磯山聖ヨハネ教会の信徒でふじ幼稚園の職員であった中曾順子さんのご家族のお話には、胸を打たれました。福島県新地町で聖公会が行っている支援について、スタッフの松本普さんに資料に基づいて説明をしていただきました。被災地から遠い所に住む私は「東北」という一括りの言葉でものをとらえてしまいがちですが、資料には今までの出来事とその場所を示す地図が載っており、地図上ではありますが、「〇〇さんが、ここでこんな働きをしてみえる。」と思うと、それがたとえ小さな活動であっても、その働きは神様に祝福されていることを強く感じました。また、塚合仮設住宅では、折り紙同好会の方々が折り紙や小物を作る活動をしてみえました。一人でなく皆で集まることの大切さを感じました。これまで報道等で「伝え聞いたこと」を、今回の巡礼の旅に参加して少しずつ具体的にとらえることができました。

この巡礼の旅の最後に、郡山聖ペテロ聖パウロ教会で夕の礼拝を行った後、原発と放射能に関する活動のパンフレットをいただきました。大震災後には「計画停電」などもあり、節電の気運が高まりました。しかし私には電力によって支えられた快適な生活が当たり前になっています。私の所属する教会の

教会報の巻頭言で、田中誠司祭は、「今の自分たちの快適な生活は何一つ変えないでいたいという気持ちをもったままではだめなのではないか」と述べ、『互いに愛し合い、共に生きていくように』簡単なようであるが実際に実行するとなると難しいイエス様の教え。あらためて心の中心に置いて常に大切にしていきたい」と記しています。

大震災と津波に加え、原子力発電所事故による二重の被害を被った方々のことを常に心に置かなくてはと思います。知らないことばかりの私です。自分の生活を振り返り、学びを深め、一人一人の小さい力を束ね、祈りとともに直接的また間接的に支え合いたいと思います。いつ立場が変わり、支援を求められる者になるかもしれません。

スタッフの方々の多くのお働きによって、この巡礼に参加できたことを感謝します。ありがとうございました。

報告者：守本 弘子

2016年3月11日午後1時から、東北教区主教座聖堂で、「東日本大震災5周年記念聖餐式」および「午後2時46分の黙想」に内外から多くの方が集い、聖餐式は東北教区加藤博道主教の司式で始まり、大震災を覚えての特祷が捧げられ、説教は大韓聖公会首座主教金根祥師父が、初め日本語で述べられ、続いて韓国語の説教は深いやさしさに包まれていた。陪餐後、2時46分の黙想は鐘の音と共に祈り、続いて被災された3人の方のお話を伺った。お話毎に唱えた頌栄が印象的でした。

礼拝後、私達一行33名は、バスで相馬市に向かい、松川浦の宿に到着後、磯山聖パウロ教会信徒荒ミヨ子姉から、姉夫婦と姪を大震災で失った体験をお聞きした。同行の「支援センターがん小屋」スタッフの松本普氏が被災状況を補足して下さいました。

翌3月12日、松本普氏の案内で新地町内を巡礼、先ず磯山聖ヨハネ教会仮礼拝所を見て、すぐ近くにあるお寺が提供して下さいました墓地に完成した埵浜慰霊碑を訪れ、真新しい碑の前で黙祷した。災害地で一番先にできるのは墓地だそうで、亡くなった人を弔うことで、心が安まるのでしょうか。松本氏も慰霊碑が出来てひと区切りがついたと言っておられた。次いで海岸近くの小高い丘にある磯山聖ヨハネ教会跡に立ち、往時をしのいだ。眼下は見渡すかぎりの更地で、かさ上げされた堤防が続いていた。

お昼頃に南相馬市のホテル六角に到着。大留さんがここから案内して下さいました。南相馬市の応急仮設住宅「寺内塚合仮設住宅」の集会室を訪問。おばあちゃん達が手芸品を作っていて部屋中に吊したり並べてあり、とてもかわいくて私たちが殆ど買いつくしたようです。現在仮設は2カ所に集約され、復興住宅などに移られたそうです。(新地町も2カ所に集約、がん小屋仮設は9割が他の町の住人で放射能関連の方たちだとか) 隣町の小高町では放射性物質汚染土をはぎ取って詰めこんだ黒い袋を並べたり積んだ更地があちこちに見られ、仮置き場だそうですが、貯蔵所の引き受け町村が無く、仮、仮がどんどん増えているようです。

震災の傷は5年経っても癒えない。放射性物質関連は・・・数値が高いのに目に見えない。表現しがたい恐怖感、無力感がつのります。でも、祈り続けようと思います。



《京都教区婦人会》

報告者：森本 愛子

早いもので、あの震災から5年の月日が経過しました。今回、日聖婦の東北巡礼の旅に参加すると

いう貴重な体験をさせていただき感謝いたします。あの3月11日の出来事とともに私にはもう一つほろ苦い思い出があります。それは、ちょうど、その4か月ぐらい前に、バプテスト教会へ通っている職場の同僚だった友人と「仕事も退職して、一度イタリアへ行きたいな？バチカンへも行ってみたいし…」という話をされていて3月19日に出発することになっていました。

そろそろ準備を始めようかなと思ってた矢先、大地震や津波が起こり、家が流されたり、家族を失ったり、原発の事故で日本が一体どうなるのかというような危機的な状況になり、いろんなことが自粛されている時に気楽に海外旅行に行っているものか自問自答しました。結局、東北方面の親戚や知人がいなかったのも、添乗員さんからの勧めもあって、ツアーに参加しました。

関空は照明を小さくして薄暗い中を日本を脱出する外国人の人でいっぱいでした。12時間の飛行時間を超えるとそこは別天地、こんな田舎の小さな村にも大聖堂があるのか！というくらいたくさんの大聖堂や歴史的な建造物に大感激しました。ホテルでは海外のニュースで日本のこと特に原発の事故が毎日報じられていて、いてもたってもいられないような気持ちでいっぱいでした。

あれから、もう5年の月日が経ったというのに、まだ時が止まったままになっている、復興には程遠い現実、そして関西に帰ってくるとそのギャップに悩んでしまいます。「ここには集落があったんですよ！、津波で流されてしまいました。」更地になって、ダンプカーが行き交い、建設工事が進められているこんな光景があちこちの沿岸部にありました。福島県の海岸は100km、壊れて修復工事をしている、気の遠くなるような現実がありました。磯山聖ヨハネ教会の信徒の方が幼稚園の送迎バスが津波に襲われて亡くなるといういたましいお話、新しい家に引っ越しをして新たなスタートを切った人達、まだ仮設で暮らしておられる人達、松本普さんや池住圭さんが指摘されたように、復興の格差が広がってきている、被災者ひとりひとりのニーズが深まってきている、この言葉がとっても印象に残りました。「ほっこりカフェ」にお菓子を送ったり、石巻の十三浜漁港のわかめを購入することによって、私の中で、東北、特に福島はすごく身近な存在になっています。

高速で移動するとき福島第一原発がちらっと見えました。たくさんの人たちが故郷を追われています。この原発の事故がどのように終息に向かうかはわかりませんが、今一度、日常当たり前のように使っているこの国のエネルギーの問題を考えることが国民の良識として問われていると思いました。たった二日間でしたが、他教区の方とも交わることができて、とっても有意義なひと時でした。企画してくださった日聖婦の役員の方々にお礼を申し上げます。主に感謝！

報告者：永井 恵子

まず日聖婦役員の皆様に感謝申し上げます。

いろいろ、お心遣いありがとうございました。

私にとって東北への訪問は二度目です。初めての折は“ほっこりカフェ”をメインに行かせていただきました。

この度は新しい仙台教会での“東日本大震災記念礼拝”に出席させていただき、思いがけず懐かしい方々にもお逢いする事が、叶い感慨無量でした。感謝でした。

2日目、軽妙にそしてご丁寧に説明下さった、松本兄ご同乗のもと、新地、南相馬を巡り、郡山聖ペテロ聖パウロ教会で夕拝をさせて頂き、皆様とお別れした後、大和組ふたりは、郡山、磐城と二泊し、ほっこりカフェを訪問致しました。

被災された方々の場所によって異なる一つ一つ内容にどうしようもない胸の痛みを覚えたことでした。三陸の漁師さん（テレビで放映）のこんな言葉が頭をよぎりました。

「津波によって破壊された海が戻ってきている。自然にやられる事もあるが、生かされていることの実感が大きい。」と、しかし、現地に立って、放射能に汚染される事とは、如何言う事なのでしょう！如何したらいいのでしょうか？誰かにぶつければいいのでしょうか？

「地震と津波だけなら後片付けをすればいい」とつぶやかれた、被災者の方の言葉が深く突き刺さったままです。

私達はどうしたらいいのでしょうか？反原発を掲げるだけでいいのでしょうか？

原発が生み出すエネルギーを当然のごとく享受して来ています。

脱原発に向かうために出来る事、それは私達自身の日常生活の中から、無駄を省く事から始めなければ、「エコノミー」「エコロジー」「カルチャー」「リッチ」の理解を再確認しなければとフレキシブコンテナ（山積みされた黒の1トン袋）行き場のない放射能の残骸。5年たっても何も解決されていない現状。

被災者の方々の問題としてではなく、自身の事として、微力であっても、ともに歩んで行く事の大切さを、忘れずにいなければ！！

主に感謝！！



《大阪教区婦人会》

報告者：井上 恵美子

今回の役員会の企画に参加させていただき、大震災後の東北方面へ初めて行くことが出来ました。バスに乗り、最初のアナウンスで「盛りだくさんのスケジュール」という言葉が、旅を終えしばらくして心に重く感じています。

今回の記念礼拝後の黙想で3人が語られ、新地では荒さんのお話を聞きました。そして宿泊した「旅館かんのや」周辺の津波による被災は原状復帰された様子から想像しても足りない状況だったと思います。

私は大震災後すぐに、または数か月経ってからボランティアに入られた方々の報告を聞く機会が何度もありました。つい最近もやむなく自主避難されたご家族のお話を聞きました。そして実際に被害を受けた地に来て、バスの窓から景色を見て、東日本大震災はほんとにひどい災害であったと改めて思い返した旅でした。バスから見えるのは広い何もない土地で、そこにショベルカーがあつちに1台こっちに1台とこの風景が続いていました。

磯山聖ヨハネ教会があった場所、聖堂は撤去されていました、そこから見えるはずの町並みや田畑は津波にすっかりとりさらわれて、ここも何もない薄茶色の土と道路工事のショベルカーだけでした。支援センターしんちの松本さんの説明を聞きながら、仮設住宅があった場所、仮礼拝所、新しく作られた墓地、教会跡と次々とバスは進んでいきました。短い時間にたくさんの情報を伝えてくださるのですが、私のほうが厳しい内容についていけず、資料を見直しながら、また書き込んだメモを見ながら思い返しているところです。磯山聖ヨハネ教会では3人が亡くなれば大きな悲しみを覚えながら、新たな場所に聖堂を与えられる予定であると聞きました。神さまに感謝です。

南相馬の仮設と六角支援隊の拠点にも訪問したのですが、やはり車窓からの景色が心に重く残りまし

た。浪江から双葉へ向かう景色は家は建っており、車も置いてあるように見えるけれども人の姿が全く見えず、生活する営みは何も感じない。「復興」とはどういうことなのか考えてしまいました。道路が出来、鉄道が通り、丈夫な建物が建つ、これは確かに復興でしょう。ふるさとに帰れない方々の復興は何だろうと。大阪の地でこれまで何も出来ていない私がやっと現実を見て知った上で、これからの支援を祈りと共に続けていこうと思いました。

報告者：鈴木 久美子

3月11日が近づくと新聞やテレビで震災関係の番組が多くなり、被災地を再度お訪ねしたいなと思っていましたら、今回思いがけずこの企画に参加することが出来感謝です。前回の訪問では、小名浜、南三陸が中心でしたので、仙台駅周辺は初めてですが町が新しくきれいで立派で人も多く驚きました。仙台基督教会での礼拝では被災地に住む3人の方々のお話を聞き黙想しました。その中のお一人の見えない放射能に脅かされながら生活しておられる若いお母さんのお話は、印刷されたものを何度か読んでいるはずなのに、初めて聞くように心に入ってきました。震災を覚えての特祷をいかにおざなりにしていたかと反省しています。バスの車窓から見える光景は、以前みた瓦礫が山積みになったり、車や船がひっくりかえった光景ではなく、重機が動きまわる更地が延々と続き、塀に囲まれた大量の除染された土の入った袋、ここがこれからどうなるのだろうという不安を感じました。今回私は「関連死」（避難途中や避難先などで死亡し認定され、災害弔意金が支給された死者）が直接死をうわまっているという現実、放射能による子供の甲状腺癌が増えている現実に気が重くなりました。記念礼拝の説教で金主教様が東日本大震災の津波の被災者にも、韓国のセウォル号の被災者にも神様が共にいてくださったと信じたいとおっしゃったように、日常の生活のなかで困難の中にいる人たちに神様が共にいて下さることを信じて出来る支援を息長く続けたいと私は思いました。



《神戸教区婦人会》

報告者：覚前 康子

三月に入り新聞、テレビ等の報道で除染作業、集団移転、復興住宅、かさ上げ工事等の記事が多く目に入ってきました。

震災から五年になった今、まだまだ進まない現状、その中にいらっしゃる方々はどんな思いでおられるのかと前から再度お尋ねしたいと思っていました。

機会を与えて下さったこと感謝いたします。

新しく綺麗になった仙台基督教会で5周年記念聖餐式、午後2時46分の黙想、大変な生活を送られている方々で、今なお仮設住宅の方、ボランティア、原発と放射能のスタッフとして活動をされている3人のお話しを聞き、五年の歳月が経っても昨日のように苦しみ、悩み、なかなか進まない復興に大変な思いをされている事等を話されました。

時間に追われ、宿泊先の「旅館かんのや」へと急ぎました。

一步出れば海、建物は無事、しかし一階部分は2メートル程海水に浸かり、鉄部分はサビで大補修工事、やっと再開された所へ宿泊させていただきました。

磯山聖ヨハネ教会の信徒の荒ミヨ子姉の体験談、津波で肉親を失い、教会を仲間を失い、時々声を詰まらせ目に涙を浮かべ、時は止まっているようでした。

しかし、新しく生まれ変わる磯山聖ヨハネ教会（1920年に農村に開かれた教会）のために動き出しておられます。

日本聖公会原発と放射能に関するプロジェクト・支援センターしんち・がん小屋スタッフ松本普さんが大変な所で皆さんを励まし明るく支えて下さっています。

今までの経過、新地では何カ所もあった仮設住宅も2ヶ所になりました（小川北原、がん小屋）増え続ける関連死（2023名 3/13現在）厳しい現状の中、仮設住宅の方々のため、教会再建のため、次世代を考え活動されています。

3月12日（土）8時30分出発、新地、南相馬、郡山へと現地を案内して下さいました。この場所が20、10キロと放射線量が高い圏内と、あちこちにある線量計の数字を見て感じるだけで、目に見えない恐ろしさ、また、除染された土を入れた黒い袋が安全だという土地の隣に仮置場として山積みにされていました。

事故に放射能汚染による被害は今も進んでいて、安心、安全に過ごせる日は来るのでしょうか？

愛する人を奪われ、住みなれた家を失った日を決して忘れない。忘れてはならない、一方で「安全」「安心」に暮らしやすい街づくりにつながって欲しいものです。

何時、私達にも降り掛かってくる問題かもしれません。

私達が自分の痛みとして共に感じ、苦しみ歩いていくことが出来ます様にと祈りつつ・・・

日本聖公会婦人会役員の皆様の上に神さまの豊かなお恵みがあります様に 感謝

報告者：仲田 豊実

2011年3月11日お昼頃、私は仕事を終えて帰宅途中だった。信号待ちをしていると、後続車に追突され、念のために受診した病院の食堂のテレビで震災の様子を知った。目に入った光景はとても辛い状況が多く、広範囲で想像もつかない事が起こったと理解した。すぐにでも現地に飛んで行って何かしたい心境だった。

この度、日本聖公会東北教区東日本大震災記念礼拝出席と巡礼に参加させていただき、極一部ではあるが、垣間見ることが出来たことに感謝する。

被災され、仮設住宅住まいの方、震災ボランティアの方々から直接お話が聞けた事は幸いであった。5年過ぎても復興はごく一部である。特に、「心の復興」の難しさを改めて知った。

放射能に関してはすぐに結果が出ないことにも不安がいっぱいである。子供を持つ親の不安は想像を絶すると思った。

夜は、女性の信者の方からお話を聞いた。「自分は震災時、海に近い自宅にいて、大津波の(6メートルくらい)の知らせで高台へ避難して助かった。その後2km先の小学校へ移動中、電車が横転しているのが目に入った。近隣の人に炊き出しをしてもらいながら生活をした。水道は止まってしまい、電気は、なんとか通じて体育館で2か月生活。その後仮設住宅へ移り4年半となる。衣類は皆さんから送ってもらい、とても助かった。姪の一人は幼稚園に勤めていて子供たちと高台へ逃げる途中に亡くなった」との事。話しされる方は、とても辛そうであったが、私たちはお話を聞くことにより状況が理解できたと思う。

磯山聖ヨハネ教会は無くなり、今はひと月に一度、画廊を借りて、毎回、室内のセッティングをして礼拝を行っているとのことだった。翌日の被災地巡礼で目に付くのは放射能残土の入った黒いナイロン袋ばかり。仮置き場が無くなり、仮仮置き場が多くなっているとか。

生活できない地域にはまだ新しい家も多く見られたが人影はなかった。「住民の方々は帰りたいだろうな。」と想像した。走行中「放射線数値」が所々に掲示されていた。

仮設住宅の一面に高齢の方々が集まって、「手芸をしている時だけは熱中して震災の事を忘れる。」と言いながら手を動かしておられた。「家族であっても、5年も過ぎれば家族でなくなる。」と言われた言葉が忘れられない。

この2日間で目にしたのは、ほんの一部に過ぎないが、被災者の皆様には言葉にできない苦労があったことと思う。巡礼に参加して「今、私たちに何ができるだろうか？第一には、このことを決して忘れてはならない。第二には期限なしに出来ること(小さい事でも)をコツコツ続けて援助(物、心、を共に)するのが、一番大切ではないか。」と思った旅であった。被災者の方々が少しでも早く元の生活に戻れるように、祈りたい。

役員さんをはじめお世話になった方々に感謝すると共に、この巡礼に参加させて頂いたことを心から感謝する。



《九州教区婦人会》

報告者：平岡 加久子

初めに日本聖公会婦人会の企画による「東日本大震災記念礼拝と巡礼」に参加できたことを感謝したい。

5年前に未曾有の大震災が起こり、恐ろしく大規模な津波によって何もかもが一瞬にして流されてしまった。それだけでなくかつてなかった原子力発電所が被害を受け、放射能を周囲にまき散らすということが起きた。日本中いや世界中を震撼させた大災害はキリスト者としてどう受け止めどう対処すればいいのか日々心を痛め悩んだことであった。

当時私は九州教区女性の会の会長の役にあり、女性の会としての支援を実行する立場であった。いち早く当時の日聖婦会長の村井恵子氏よりワークショップひまわりのクッキー購入支援が通達されて九聖女でも支援が始まったのだった。震災後2年目の2012年5月に九州教区による『震災地訪問ツアー』でワークショップひまわりを訪問。喜々としてクッキー作りに励む知的障がい者の方々。『聖公会婦人会ありがとう』と感謝の言葉を受けた。その後復興はどのようになされたのか、人々はどのように立ち直っているのか、是非この目で確かめたいと仙台に降り立った。

仙台基督教会で13:00から始まった『記念礼拝』は厳かに行われた。礼拝の間中は人間の愚かさが災害を2重にも3重にも酷いものにしたことを懺悔していた。『原子力発電所』を作った人間の罪の深さを心から謝罪し続けた。そして『午後2時46分の黙想』を捧げ被災者の方々のお話をお聞きし、又深い痛みを覚えた。

翌日12日相馬市から新地に向けて巡礼に出掛けた。案内の松本普氏は被害がいかに大変なものであったか、復興とは名ばかりで被害者の心に沿ったものでないことなど話された。

具体的な数を出して、今も続く関連死の多さを指摘されどんどん増えていることを教えて下さった。そして自主避難はカウントされないし、支援金も出ないというおかしさがあると言う。新地のがん小屋を訪問してから南相馬を経て郡山へバスで巡礼していく途中、広大な平坦地が広がり、除染した土を入れた真っ黒な大きい袋がずらっと並んでいて底知れぬ不気味さと虚しさを感じられた。また帰還禁止地区に真新しく立派な住宅が無人のまま並んでいるのも心苦しい風景であった。さらにその庭に除染土を

入れた黒い袋がさりげなく置かれているのも痛々しく又悲しく感じられた。その地域を通るときにはバスの窓も閉め切ったままで、現実の厳しさを思い知らされる。

最後の巡礼地として郡山聖ペテロ聖パウロ教会に行き、礼拝堂に入ることが出来た。そこはセントポール幼稚園を併設しており九州教区の『リフレッシュプログラム』の一環として園児と家族を長崎の高島に招待して交流を深めている。私も 2 回食事のボランティアに参加したことがあり、何やら親しい想いが込み上げてきた。

原発のせいで罪のない子供達が思い切って外で遊べない現実を政府はどう考えているのだろうか。こんな苦難が押し寄せているのに次々と原発を再稼働している最近の状況。

日本聖公会総会決議に全面的に賛成し、小さいかもしれない支えでも一步一步復興の役に立つべく手に手を取り合って関わっていきたく強く思った。

今回の日聖婦の企画は東日本大震災と被災者のことを決して忘れてはならないことを再認識させていただいた。会長様はじめ役員の方々に深く感謝いたします。

報告者：田中 初美

今回仙台基督教会にて東日本大震災記念礼拝に出席できた事は感謝でした。午後 2 時 46 分の黙想。犠牲になられた方たちの魂の平安、そして今なお困難を抱えている方たちを覚え祈りました。黙想後お話では特に原発事故により子供の甲状腺がんが見つかり手術しその子供さん、家族がこれからどんな重荷を背負い生きていくのかと思いました。普通に暮らしておられる方も放射能の恐怖とそれを言えない様々な状況を聞き、私達に何が出来るのかと問いただきました。宿泊先の相馬市松川浦の旅館「かんのや」では「支援センターしんち・がん小屋」のスタッフ松本さんと被災された（みよちゃん）にお話を聞き一緒に食事をして辛い体験、思いの中でなおも感謝し私は幸せと言われる暖かな思いに胸がいっぱいになりました。12日松本さんの案内で仮礼拝所（齋藤研さんスタジオ）、被災された方のお墓、慰霊碑で祈りの時を持ちました。磯山聖ヨハネ教会跡地は3年前に行った時は跡地にて祈りの時を持つことが出来ましたが今回侵入禁止になっており少し離れた所で祈りの時を持ちました。新しい教会も決まったと聞き嬉しい思いです。

周りは整地され常磐線の工事も進み3年前とは様子が随分変わっていました。

神様が作られた生態系を人間は壊している。人間の犯した恐ろしさを思うと松本さんは言われていました。

松本さんから六角支援隊の大留さんの案内に代わって周っていると、除染処理袋があちこちに見られ仮置き場が増え仮、仮置き場が出来ている事。仮置き場の周りには壁を作っている光景は異常です。塚合仮設に行き集会場ではおばあちゃん達の手作りの品が飾られていてとても可愛いかったです。いつか前のように親子3代で暮らしたいという思いで作られていたのでしょうか今はそれもかなわない。見送るおばあちゃん達の姿に胸がいっぱいになりました。

最後に郡山聖ペテロ聖パウロ教会に行き夕の祈りの時を持ちました。礼拝後セントポール幼稚園の理事三宅さんより教会のステンドグラスの事を聞き、3年前にお会いした方がこんなに素敵なステンドグラスを修復されたのだと感謝の思いでいっぱいになりました。

セントポール幼稚園では子供達を守る為大変な苦勞をされた園長始め教職員の方、理事長さんの思いが伝わり震災前より園児が増えた事をお聞きし本当に良かったと思いました。

5年経っても状況は変わらず、そして震災関連死は増えて続けている現状を私達は忘れてはいけないと思う。

今回一日で回りゆっくり交流出来なかった事は残念ですがお会いできた事を感謝し、何も出来ないのですが又行こうと思います。今回日聖婦の役員の方に大変お世話になりました。

細かな配慮をして頂き感謝でした。

報告者：秋山 みどり

主のみ名を賛美します。

今回、日聖婦からのご案内、「東日本大震災五周年記念礼拝と巡礼の旅」に参加できたことを感謝します。又、役員の方々、チャプレンのご苦勞に感謝します。

今年初めて3月11日仙台基督教会での東日本大震災5周年記念聖餐式、引き続き午後2時半から黙想と祈りの時に与り、2時46分には黙想の時を持ちました。韓国から、日本の主教様方、各教区からの司祭様方とたくさんのお出席者との日のために集まった方々との力強い祈りが、天に召された方たちにも届いたことでしょう。一方、今なお続く被災者の方々にも神様が希望を与えてくださるようにと、切に祈ることでした。

日聖婦のプログラムについての感想

・新地訪問。松本普さんの案内と説明を受けながら、聖公会が取り組んでいる新地ベースへ行きましたが、昨年、九州教区の出組で乗用車で回りました、どうしても、一年前と比較してしまいます。今回はバスでの移動だったので、車上からの見学が多く、たち寄りところは限られてしまいます。昨年の皆さんと交流し、教派を超えた集まりの中、教会再建への熱い会話を思い出し、がん小屋での現地の方々と会う機会がなかったのは、ちょっと残念でした。ただ、磯山聖ヨハネ教会の跡地（今年は侵入禁止になっていた）、近くで慰霊碑の前で、お祈りを捧げられたことは感謝でした。

・六角支援隊（ホテル六角所有者の大留さんがそのホテルを支援ベースとしている）の大留さんと案内が代わり、6号線を下り、途中塚合仮設住宅に立ち寄りました。そこには、おばあさんたちが作ったたくさんのお土産やぬいぐるみが！！各教区、お土産にわいわいと買い求めました。短い時間を過ごした後、バスに乗り込んだ私たちを、見送ってくださっていた姿がいつまでも目に浮かびます。仮設住宅の中はひっそりとして、大留さんや松本さんの話の現実が目の当たりにありました。仮設住宅に5年たっても残らざるを得ない人、若いものに移転を譲って仮設住宅に残っている老夫婦、仮設住宅一つとってもいろんな事情がありました。

・最後に、郡山聖ペテロ聖パウロ教会で閉会のお祈りです。土曜日だったので、園児には会えませんでした。残念です。三宅理事長の話で、九州の高島でのキャンプがとても子どもたちのリフレッシュに役に立っていると聞き、九州教区のプログラム、今年も継続を願いました。11日の夜、旅館で出た他教区のホームステイ、保育士さんのリフレッシュのプログラムなど、子どもたちの心のケアにどの教区も心して取り組んでいることを実感しました。

・やはり一番問題なのは、福島放射能汚染の影響が復興を遅らせているということだと思います。仮置き場に山のように置かれて、しかも、引き受ける場所がないので、仮、仮置き場が増えている、その仮の期間もわからないということでした。もっともおかしいと思ったのは、その黒い袋が見えないようにでしょうか（私の思い）、壁が除染処理袋を囲むように出来ていることでした。その壁の色と隠されている色の対比が、何とも矛盾を感じる光景で、悲しくなりました。道路が整備され、嵩上げされ、立派な橋が出来、整地されてはいたけれど、そこはまだまだ「生活」する場所とは思えませんでした。第1原発に近い帰宅困難地域では家々の前にはバリケードが張られ、入れないようになっていました。昨年と違うのは、住むことを断念して壊した跡の空き地が多々あることでした。1人1人の生活はにおいて

行かれ、ますます、格差、分断を感じる政策がとられていると思いました。

この巡礼の旅は私たちが見たもの、聞いたこと、感じたことを伝えてほしいという趣旨のもと、行われたわけです。どれだけのお伝えが出来るかわかりませんが、子どもの甲状腺の異常が多くなっているという報告を聞くと本当に心が痛みます。未来のことを考えると子どもへの放射能の影響を考えずにはおられません。高島の取組みの続行、他教区がやっていたホームステイも出来ないか、などなど。

5年たち風化が心配される中、「忘れない」「関わる」ということを大事にしていきたいと思います。



《沖縄教区婦人会》

報告者：真栄城 美子

5年という歳月、被災者にとってどのような時間だったのでしょうか。復興しつつある地域と、そうでない地域があることを報道等で知っているが、松本普兄に案内してもらった新地町の教会跡地で震災前の写真を見て言葉がなかった。写真のような集落はなく整地されているとはいえ悲しい。

前夜、当時の様子を話して下さった荒ミヨ子姉は決して暗い表情ではなかったが目前で自宅が流され親族も亡くなられ苦しい中、こんなにも強く生きてこられたんだと感心するしかなかった。

私は沖縄教区が企画する one family で郡山市のセントポール幼稚園へボランティアとして2014年から関わっています。原発の被害に苦しむ地域（人々）への支援が出来ればと参加していますが、子どもたちとあそび先生方とおしゃべりをする中で何かをしようではなく、この現状を忘れずにいることが大事だと感じています。5年前のあの日、遠い沖縄にも津波がという心配から預かり保育で残っている子どもたちを帰宅させるのに必死でした。当園は海に近い川沿いにあるからです。幸い被害はなく安堵でしたが、情報収集の為に見ていたテレビ映像は忘れることはできません。自然災害の恐ろしさと今も続く福島第一原発の事故による放射能の飛散。体験された方々の苦しみは消す事は出来ないと思いますが、苦しみを少しでも分かち合えるよう支えていくのが私たちの務めだと感じています。

この度、東日本大震災記念礼拝と巡礼に各教区婦人会の皆さんと参加する事ができ感謝しております。日本聖公会婦人会役員会の皆様大変お世話になりました。

報告者：松田 恵子

東日本大震災5周年記念聖餐式に各教区主教、司祭、各教区婦人会、信徒が集い記念礼拝が行われた。礼拝後日本聖公会婦人会本部主催による被災地巡礼へ出発。松本兄の案内で埴浜慰霊碑（東林寺）震災被害者の碑へ。震災で墓地、平和の礎が流され新設置された場所で三原司祭のお祈りの後、礎山聖ヨハネ教会（1920年伝道開始）の跡地へ。高台の教会跡から見下ろす広大な土地、がれきが処理された赤土が目に入る。巡礼中、現地を見て亡くなられた方や被害の事を思い涙ぐむ。亡くなられた多くの御霊の安らかなことを祈ると共に一日も早い復興を祈った。車窓からは除染の廃棄物の入った黒い袋が積まれている様子が見える。どのように処理されるのか想像を絶するものでした。仮設住宅集会場ではキーホルダー、ふくろうなどの小物が沢山飾られ売り上げを支援資金にする為に手作りが続けられているとの事。皆様の元気で接客されている姿にこちらが元気をもらいました。テレビ映像とは違う被害の地の真の姿がそこにある。現地を見て実感した。

郡山聖ペテロ聖パウロ教会で夕の礼拝後解散した。

沖縄教区で東日本震災での被災地巡礼が企画されるともっと多くの方と分かち合いが出来ると思いました。

日本聖公会婦人会役員会の皆様ありがとうございました。



日本聖公会婦人会役員 高垣 成美

この度、各教区の婦人会のお仲間と東北へご一緒できたこと、感謝で一杯です。

私が初めて東北の地を訪れたのは、日聖婦の役員の仕事をしていただくようになってまだ日も浅い2014年の2月でした。前田会長、尾松副会長と一緒に小名浜から南相馬、新地を廻って、仙台の主教座聖堂の落成式に出席させていただきました。震災後、3年もたつのに復興ままならない広大な地域、すっかり大都会の機能を取り戻した仙台に念願の主教座聖堂落成のご苦勞、「もう、欲しいものは特にない、ただ、忘れないでほしい、来てほしい」という被災者の方の言葉、これらを一人でも多くの方たちに知っていただきたい、という思いを抱いて、私の役員としての働きが始まりました。

その他、個人的に東北の東海岸を旅する機会があり、この企画の下見にも参加でき、私には今回が4回目の東北訪問でした。それぞれにたくさんの方に会い、多くの学びを得ることができました。特に今回の旅で得たものについて、ご報告させていただきます。

一見関係なさそうですが、日韓の聖公会のつながりの深さ。落成式の時にも韓国の主教様方がご参列なさっておられ、青年たちの交流も東北の地でなされていることをききました。

宿泊先で、夕食前にお話を聞かせていただくはずの松本 普さんが交通渋滞のために到着が遅れ、その間に各教区の方たちの東北への取り組みを聞かせていただくことができました。結果オーライ？ 良い分かち合いの時間になりました。

翌日も時間が押して、高速道路を使って郡山へ向かうことになったのですが、ドライバーの方が遠目に見える福島第一原発や、路端の線量計の数値のことなどを案内して下さり、安全なうちに放射能というものをわずかながら実感することができました。

実は、下見の折には立ち入り制限区域の中で牧畜を行っておられる「希望の牧場」を訪問し、今回の旅の立ち寄り先として検討をしていたのでした。どの位の線量の所にどの位の時間滞在しても大丈夫か、或いは、本当のところ何処がどの位の線量なのか・・・それは大変難しい問題で、現地におられる方の間でも、専門家の間でも様々なご意見があるようです。

今回の旅では全国から様々なお立場の方々のご一緒するので、一番安全策をとろうと、「希望の牧場」訪問は取りやめた経緯があります。

34人の参加者がそれぞれに、何かを得るもののある旅であったら、と思います。私もこれからの人生でずっと、東北だから、被災者だから、ということではなく、つながりを持つことのできた大切な地、人としてさらにつながっていききたいという気持ちを新たにしています。





《振り返り》

日本聖公会婦人会
副会長 尾松 澄代

2日目はバスで、磯山訪問の後、「原発から命と環境を守る会」の大留隆雄さんに、放射能 20 km圏内の南相馬の街や村々を案内していただきました。街は人影も復興の兆しも殆どなく、特に海辺の村や田圃一帯は津波に洗われた5年前とほとんど同じ形状のまま荒れ果てていました。しかし今回この田圃に至る所に、1000個とも2000個とも数えきれない数で、汚染土を詰め込んだビニール袋が黒々と積み上げられている光景に、目を疑いました。

これは最近、政府が耕作をあきらめたこの辺りの地主から土地を買い上げ、最終処分場が決まらないままに仮・仮置き場として汚染土が運び込まれているとのことでした。

「袋からは日々放射能が漏れ出し、ビニール袋はそのうち破れだすでしょう。土地を売った人はお金が入り、安全なところに引っ越すことも出来るが、そうでなくここに住み続けなければならない人や、道一本隔てた近隣の住民はもろに被曝することになります。こうして困難の中で起こる一つ一つのことが更に住民の格差と軋轢と苦しみを深めます」と、淡々と話される大留さんの口調には、かけがえのない生活の場やふるさとが放射能に汚染され、人の命も生き様もおびやかされたまま放置される悔しさ、その解決の糸口がないもどかしさを呑みこんでおられるのを感じました。

この後南相馬から郡山へ向かう山の中でも、至る所に無数の汚染土の袋が集められておりました。

この他にも、訪問の中でお出会いした方々やそのお話し、それぞれの場所や光景を通して、被災地の方々が抱えられる出口の見えない苦難を、10教区のみなさまと共に、直に触れ、実感できましたことはこの旅の大きな成果でした。

3年前、横浜での第23(定期)総会の後、当時の役員会の企画で出席者の多くが福島へ連れていただきました。この総会で私たち京都は会長選出教区に選ばれ、現在の前田会長始め、役員の何人かもこの旅に参加しました。その折に目の当たりにした福島の状況は私たちの心に沈み、京都の役員会の3年間は、いつも大震災被災地が根底にありました。

今回こうして、全国各教区の方々と被災地を訪問させていただき、被災地の現実の一端を共有できましたこと、またこれを各教区へお持ち帰りくださいまして、各教区におられる大勢のみなさまと分かち合ってください、被災地の方々に共に寄り添うお気持ちを上げ、祈り続けてくださいますことで、この3年間の役員会の思いの一つが、結実するものと受け止めております。

改めてお集まりくださいましたみなさまと、ご協力をいただきました各教区のみなさまに心より感謝申し上げます。

